対照的な姉妹

星流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
対照的な姉妹

【Ｎコード】
Ｎ４５６２Ｚ

【作者名】
星流

【あらすじ】
昔から、ずっと不思議だったことがある。
私達姉妹は、なぜこんなにも似ていないのだろう。
天才型でワガママ女王様の姉、咲良（さくら）にこき使われる、努力型で平凡な妹、美月（みつき）の日常。
恋愛もまったり進展します。

ワガママ女王様

小さい頃から、私は不思議にずっと思っていた。

そして、高校2年生となった今でも、その疑問は消えずに…
むしろ、理不尽な遺伝子のいたずらに腹立たしささえ感じてしまう。

「美月、私の部屋にある雑誌もってきて。」

リビングのソファーで携帯をいじりながら、私に向かって命令する。
長く艶のある茶髪にゆるいパーマを本日かけてきたばかりだという
私の姉、咲良(さら)。

「ベッドのそばのテーブルに置いてあるから、早くしてよね。」

現在、私は今日の授業の復習をしている。
リビングのテーブルで。

彼女の睫毛で覆われた大きな瞳は飾りなのか、それとも私が勉強していようが関係ないのか。

…9割の確率で後者だろう。

まず、何様かと聞きたい。

「美月〜。」

少し強い口調で急かすお姉さまに、無意識にも頬が引きつる。

久しぶりに早く帰ってきた姉と2人きりでお留守番など、始めからいい予感はしていなかった。

けど、さすがに私も我慢の限界だった。

「さっき、コーヒー淹れてあげたでしょ！その後、せっかく淹れてあげたコーヒーが冷たくなったからって、また温めさせたのは誰よ！」

私は椅子から立って、あくまで冷静にお姉ちゃんに聞く。

「だって、猫舌なんだもの。熱いコーヒー冷ましてたら、思いのほか冷めちゃったんだからしょうがないじゃない。」

こちらを見向きもせず、淡々と答える姿にまたイライラが募った。

「じゃあ、携帯の充電器をもって来させたり、お姉ちゃんの洗濯物

を干したり畳んだりしたのは誰のお願い？」

家に帰ってきて、早2時間。この間、私は勉強できていないに等しい。

すべて、彼女の命令により使われた。

「私しかいないじゃない。母さんは買い物に言ってるし、お父さんは今日も夜勤だし。

そんな少し前のことも、分からなくなるくらい記憶力がないのかしら？」

…もう限界です。

鼻につくような言葉運びで、蔑まれた。

その勝ち誇った顔に欠点があれば、もう少しこの怒りは落ち着いていただろうに。

もしくは私の容姿が平凡でなければ、この敗北感は和らいだかもしれない。

力の入る拳の行き場のなさに、わざとため息をもらす。

少しだけ冷静になれた気がする。

…気のせいかもしれないけど。

そして、ある結論にたどり着いた。

自分の部屋に戻って勉強しよう。

お姉ちゃんの命令は無視。無視。何が何でも無視。

イヤホンを耳栓代わりにして、聴覚をシャットアウト。

これで、お姉ちゃんの声は聞こえない！

私は勉強道具を素早く片付けて、自分の部屋へと向かう。

つもりだったのに…。

「こんなもんしたって無駄よ。この間のテストは誰のおかげで赤点免れたのかしら？」

…いつの間にか背後に立っていたお姉ちゃんにイヤホン没収され、おまけに弱みを出された。

えぇ…私の苦手科目である数学が前回のテストで９０点の高得点を取れたのは、認めたくないけど、お姉ちゃんの教育のおかげ。

努力しなくちゃ覚えられない私と違って、授業さえ聞いていればテ

スト期間など必要なかった彼女の説明は、悔しいがめちゃくちゃ分かりやすい。

「そうね、今月中ずっと私の言うとおりに動けば、来月の中間テストの成績が中の下から、上の中くらいにはなるかしら？」

「…雑誌をすぐに持ってきます」

私はまとめた勉強道具をテーブルにおいて、２階の彼女の部屋へと渋々向かうことにした。

めちゃくちゃ嫌みな言い方だったが、留年したくはないから、しょうがない！

私は階段をのぼった。

だが、私はこの時気づいていなかった。

今日が１２月１日だということを、

つまり、３１日間もお姉ちゃんのわがままを聞かなくてはいけないということを。

その事実に気づいたのは、もう少し後の話で、

すぐさま激しい後悔に襲われたのは言うまでもない。

そんな私に向かって、
「笑っちゃうくらい、単純よね。美月は。」
とムカつくくらい綺麗な微笑を浮かべて、読み終えた雑誌の片付けを私に命令した。

至福の時は放課後

幸せだぁ…。

甘い香りに包まれながら、私は解放感を感じていた。

家にいるよりもゆっくりで自由な時間を過ごせるのが、学校って…どういうことなのか聞きたい。

今日は月に2回の料理部。
本日のメニューはカップケーキである。

手軽で持ち帰りやすいため、彼氏がいる子たちの食いつきがよかった。

私はもちろん、そんな相手はいない。

だが、これでも、天才型の姉より家事能力が高い自信はある。
だてに毎日こき使われてはいない。
むしろ、それくらい誇れるものがなければ、本当に悲しくなってくる。

「よし、出来た！」
カップに生地を流し入れて、オーブンにセットする。
あとは15分待つだけだ。

「さすが、美月、手際がいい。」
しっかり者で、この部活の部長の清香（きよか）に誉められると、純粋に嬉しい。

「本当。毎日、朝ご飯とお弁当作ってるだけあるよねっ！！」

明るい性格で、屈託のない笑みが可愛らしい彩（あや）ちゃん。
ほわほわした彩ちゃんは私の癒やしだ。

「お母さんは朝早いからね。お姉ちゃんは朝起きれないから、消去法で私しか作る人いないだけだよ。」

まぁ、お姉ちゃんは起きたとしとも作る気ないんだろうけど。
正直、姉の料理姿は絵にはなりそうだが、まったく想像できない。

「美月のお姉さん、一回見たことがあるけど、めちゃくちゃ美人だよね。」

「えっ！？清香ちゃん見たことあるの？」

「偶然ね。お姉さんと美月が一緒にいたときに会ったの。優しそう

なお姉さんだったよ。」

あぁ、あの日は上機嫌だったからね…。

面倒くさがりではあるが、社交的なお姉ちゃんを悪く言う人は…私を含めごくわずかだ。

私自身、お姉ちゃんの本性を言わないからね。

後が怖いし、言いなりになってるなんて恥ずかしいし。

「美人なお姉さんとお買い物？」

「確か、ケーキ食べに行くって言ってたよね。」

そう、あの日は衝撃的だった。

私がお姉ちゃんの命令で作ったガトーショコラ。

それをバレンタインに、本命に渡したらしい。

そして、後日、なぜかケーキを奢ってくれた。

渡した人とどうなったのかは、まったく興味なくて聞いてないけど…食べに行ったケーキはおいしかった。

「お姉さんがいるっていーな。彩は弟しか、いないもん。」

「あのね、お姉ちゃんがいたって、毎回奢ってくれるわけじゃない

よ？彩ちゃん。」

あの日がお姉ちゃんが私に何かを奢ってくれた最初で最後の日となるかもしれない。

この先の未来に、そんな幻のような夢を期待するだけ無駄なのだ。せいぜい、一緒に買い物に行っても、荷物持ちにされるのがオチだ。

その光景が簡単に思い浮かぶから、恐ろしい。

「いいなぁ。うちの兄貴なんて、自分だけ遊んでばっかりだよ。」

「悠希（ゆうき）さん？」

清香のお兄さん、悠希さんは私達の２つ上で、今は大学生。

去年、同じ委員会でお世話になったが、誰にでも優しくて、ノリのいい彼は、年齢関係なく友人が多かった。

１回、可愛らしい女性と歩いているところを見たことがある。

清香には秘密にしておきたいのか、私と目があったとき、とても慌てていたなぁ。

「美月、うちの兄貴と美月のお姉さんと交換しない？」

悠希さんとうちのワガママ女王様のお姉ちゃんじゃ、明らかに割に合わない。

「遠慮しとく。」

清香が損するから、と続けようとしたところで、オーブンが鳴った。

私はカップケーキにきちんと火が通っているか確かめるため、竹串を取りに行った。

◇◆◇◆

「悠希先輩、美月ちゃんの眼中にも入ってないよね。」

「なんか、可哀想だから、美月のカップケーキを兄貴のお土産に持って帰ってあげよ…。」

「美月ちゃんも鈍いっていうか、なんていうかね～。」

◇◆◇◆

美味しくできた持ち帰り用の３つのカップケーキは、清香に１つ（どうしても食べたいらしく）あげた。あとの２つは、お姉ちゃんとお母さんが食べた。

「まぁまぁね。
次にカップケーキ作るときは、ココア風味にしてよね。」

いちいちムカつく感想は余計だったけど。

週末の帰り道

キンコンカンコーン

今日の授業の終了を告げるチャイムが校舎に鳴り響いた。

私の周りの人達は、早々と机の上を片付けて、いそいそと教室を出て行く。

本日、週末。

金曜日の授業は、厳しい時間割でも、明日が休みだと思うと多少の我慢も出来るものだ。

だが、現在の私の心境は正反対だ。

可能ならば、土日も授業を入れて欲しい。

休日は家にいる分、お姉ちゃんからの命令の数がハンパないのだ。

私は先週の土日を思い出し、更に学校に止まりたくなった。

だが、今日はそういう訳には行かないのだ。

「美月〜！これから、美味しい物でも食べに行かない？」

節約家な清香が珍しく、私を誘ってくる。

私は授業中にしかかけない、黒いフレームのメガネをしまいながら、美味しい物という誘惑を振り払って断った。

「ごめん！今日、用事があるんだぁ…。」

これから、私はお姉ちゃんが作る年賀状の手伝いをすることになっていた。

お姉ちゃんが大学から帰ってくるまでに、

送る人の住所をパソコンに打ち込まないと私の休日はなくなってしまう。

また、どこでこんなに知り合ってくるのかというほど、彼女の送る相手は多い。

よく言えば社交的、悪く言えば外面（そとづら）がいい彼女は、面倒くさがりな癖にこういうことは忘れないのだ。

それに加え、私も年賀状を作らないとヤバい。

中学の時の仲がよかった友達に送るだけだが、姉のものに上乗(うわのせ)すれば、また結構な数になる。

機械に弱い私にとって、気が遠くなる大変な作業だ。

「あら、残念。せっかく臨時収入入ったのにな〜。じゃあ、また今度、誘うね！」

「うん。ごめんね。じゃあね！」

清香に手を振って、教室を後にした。

はぁ…年賀状頑張って作らないと。

帰り道、私は考え事をしながら歩いて帰ることが多い。

家までの寒い帰路も、考え事をしていれば、意外と早く着くものだ。

それにしても、本当にお姉ちゃんの命令に振り回されているなぁ。
私。

もちろん不本意だけど…住所さえ入力すれば、私の年賀状もコピーしてくれるって言ってたし。

…えぇ、それに釣られて今回の命令を遂行することになりましたとも。

だって、機械は本当にチンプンカンプンなんだもん。

文字入力くらいなんとか出来ても、コピーとか印刷とかはお手上げ状態だ。

っていうか、今月は基本的にお姉ちゃんの命令聞かないといけないからね。

成績アップのために耐える気でいたが、
今月は…まだまだ半分以上ある。

私は無意識に大きなため息をついて、とぼとぼ歩いて帰った。

予定は狂うモノ

…やっと年賀状、出せたぁ～。

私は解放感を感じ、ポストの前で一息ついた。

只今、土曜日の昼時だ。

私の当初の予定では、今頃は家で課題をやっているはずなのだ。

冬休みは年末年始の準備のためにあるはずだが、先生達は容赦なく大量の課題を出す。

要領の悪い私は毎日コツコツやらないと、全部終わらないのだ。

だから、頭の中できちんと計画を立てていたのだが、予定は昨日の夜にすべて狂った。

帰ってからすぐに取りかかった、住所の入力。

私は挫折しそうになりながらも根気よく続け、最終的に3時間費や

し入力を完了した。

あくまで、私はお姉ちゃんが帰ってくるまでに終わらせたのだ。

だが、お姉ちゃんが帰ってきて、入力が終わったのを報告していたとき、

「美月ちゃん、お父さんと私の年賀状も作ってくれない？」

私よりも機械オンチなお母さんが、まさかのお願いをしてきた。

お母さんがパソコンを使うのは、お姉ちゃんからしたら勘弁してほしいだろう。

パソコンの持ち主はお姉ちゃんだ。

お母さんに使わせたら、データが吹っ飛ぶだけじゃなく、最悪、再起不能になるかもしれない。

大学のレポートのデータもきっと入っているはずだ。

そんなことになったら、火の粉が私に降りかかる。

確実にやつあたりされる。

言うまでもなく、すぐにお父さんやお母さんの年賀状も作るようにと、ノルマが追加された。

親戚や友人、知人にとお姉ちゃん以上に年賀状を書く2人の年賀状の追加は…正直いじめだ。

住所の入力は普通に文章を入力するのよりも面倒だ。

地名や人名がすぐに変換されないし、読み方が分からなくて漢字を探すのにも苦労する。

最終的に文字入力は日付を越えるまでかかった。

「本当に機械に弱いわよね～。私だったら、美月の半分はかからないのに。」

朝、お姉ちゃんに皮肉を言われた。

ならば、自分でやれ、と心の底から叫びたくなったが、理性を総動員させて我慢した。

成長したな…。私。

私は自分をたたえて、達成感を感じた。

さて、と頭を切り替える。

今、家に帰ってもお姉ちゃんはいない。
大学に用事があるらしく、夜まで帰ってこない。

これから、どうしようか。

せっかく外に出たし、どこかに寄っていきたいなと思う。

課題もしなくちゃいけない、と考えたとき、シャー芯がきれていたことを思い出した。

止まっていた足を動かし、私は書店へと向かった。

◇◆◇◆

家から歩いて２０分で行けるこの書店は、品揃えがいい。

文房具と本を眺めているだけで、１時間は余裕に潰せる。

まだお昼ご飯を食べていないが、軽食を販売しているスペースもあり、不自由はない。

買い物は帰る間際にするのが、荷物が邪魔にならなくていい。

まず、話題の新刊コーナーを見に行こう。

「美月？」

私は文庫コーナーへとむかう途中、後ろから私の名前を呼ぶ声がしたので、振り返った。

聞き覚えのある優しい男声で、誰だかすぐにわかった。

私より頭1個分高い身長。

清香と似ている中性的な顔立ち。

髪の毛は黒から濃いめの茶色に変わったが、優しい雰囲気は変わらない。

「悠希さん。」

清香の兄である彼はにっこりと笑い、久しぶり、と返した。

和やかなひととき

まさか、この前の話に出てきた彼に会うとは…偶然とは時に奇妙なものだ。

悠希さんは、今日は彼女さんと一緒ではないらしい。

そうでなかったら、私は彼に誘われていないし、向かい合ってカフェコーナーに座ってもいない。

ここに来るのが始めてだという彼は、とりあえず、私と同じカプチーノをオーダーした。

温かくておいしいカプチーノを飲みながら、私達は他愛もない話をしていた。

話し上手な彼の話は、いつもおもしろい。

去年、委員会で会ったときには、必ず話しかけてくれた。

ふと、そのときのことを思い出して、こんな時間が懐かしいと思えた。

だが、同時に雰囲気やちょっとした仕草に変わったなぁと感じるところもある。

もちろん悪い意味ではなく、ただ、大人に近づいているんだなぁと思った。

考えてみれば、悠希さんに会うのは久しぶりだ。

6月に清香の家に泊まりに行ったとき以来だろうか。

半年くらい会っていないだけで、こんなにも大人っぽく、頼もしく思えるものなのだろうか。

男の人の変化は侮れない。

それがちょっとだけ羨ましく思える。

私ももう少し身長と胸が成長して欲しかった。
スタイルのいいお姉ちゃんと並ぶと、悲しくなるのだ。

「そうだ。美月、この前のカップケーキ美味しかったよ。」

悠希さんは思い出したように、微笑みながら言った。

…カップケーキ？

私は話が分からず、少し考えを巡らせた。

あぁ、もしかして、部活で作って清香にあげたあれのことかな。

「ありがとうございます。」

悠希さんはカプチーノをごくりと一口飲んで、少し冗談っぽく愚痴を言いはじめた。

「また美月の作ったお菓子が食べたいな。
去年はもらい放題だったのに、今年はまだカップケーキだけしか食

べてないよ。」

そりゃあ、今年から大学生になったのだから、わざわざ渡しには行けない。

そもそも、去年だって悠希さんにあげようと思っていたわけでない。何人かの女子から貰ったにも関わらず、悠希さんは委員会や帰り道でしつこく催促するのだ。

よほど、甘い物が好きなのだろう。

ならば…と思い、悠希さんに一つの提案をしてみた。

「じゃあ、明日、お家にお邪魔してもいいですか？ ババロアを作って持っていきます。」

実は、明日のおやつにババロアを作るようにお姉ちゃんから命じられていた。

お菓子づくりは趣味の領域なので、命令されなくても作ることだってある。

大抵はお姉ちゃんのリクエストで、作るお菓子が決まるのだ。
清香が確かババロア好きだったし、兄妹で食べれるなら、ちょうどいい。

だが、彼は少し目を見開いたまま固まっている。
応答がない。
悠希さん、ババロアは苦手なのだろうか。

「悠希さんが嫌なら別に…。」
清香の分だけ持って行きます、と続けようとしたところで、遮られた。
「ごめんごめん。嫌じゃないよ。ちょっとびっくりしただけで。」
少し顔を赤らめて、彼は弁解した。
私は安心して、笑った。
「そうですか。じゃあ、少し多めに作るので、清香と一緒に食べてくださいね。」

清香にも後でメールで伝えておかないとね。

「…そういうことか。あ、うん。頑張って死守するよ。」

悠希さんは何故か苦笑気味に頷いて、溜め息を小さくもらした。

独り占めにしたいほど、悠希さんもババロア好きなのだろうか。

似たもの兄妹だなぁ、と私はカプチーノを飲みながらこっそり笑った。

聖夜の予定

初雪が降った寒い道を新鮮に感じる。

家からゆっくり歩いて２０分、私は清香の家についた。

右手には、今朝作ったババロアの入ったボックスを持っている。

味にうるさいお姉ちゃんから、おいしいと、嫌みなしの賞賛をもらったので、きっと２人も喜んでくれると思う。

チャイムを鳴らすと、清香と悠希さんがいっしょに出迎えてくれた。

いくらそっくりな２人でも、こうやって並んで見るとやっぱり違うところもあるものだ。

特に今は、それがはっきりと分かる。

「いらっしゃい。美月、わざわざありがとね！」

清香の目がめちゃくちゃ輝いている。

待ってましたという表情だ。

いつもはお姉さん的存在な清香も、女子高生らしく甘い物には目がないのだ。

下手すれば妹のようだと、私は小さく笑った。

「ううん。これ、お待ちかねのババロアね。」

「やった！早速、切り分けてこよっと。あ、美月あがってね。」

一気にテンションが上がった清香はすぐに食べるらしく、キッチンに消えていった。

あの勢いなら、一気に全部食べてしまうかもしれない。

すらっとした長身とスマートな外見に惑わされがちだが、清香は大食いなのだ。

しかも、食べても太らない、ニキビもできないという、女子なら誰もが憧れる理想的な体質の持ち主だ。

私が作ったワンホールのババロアなんか、余裕で食べれるのだろう。

やれやれという顔している悠希さんと目が合い、お互いに吹き出した。

互いに思っていたことは同じだったようだ。

「寒かっただろ？上がって暖まってよ。」

「はい。お邪魔します。」

◇◆◇◆

広々としたリビングは暖房がついていて、冷えた身体が喜ぶ。

私はふかふかのソファーに座って、悠希さんが淹れてくれたカフェオレを飲んだ。

「ふぅ～おいしい。」

私はため息をつくように零すと、悠希さんは小さく何かを呟いた。

小さすぎて聞こえなかったが、私は特に気にせず、悠希さんにカフェオレのお礼を言った。

「苦くないか？ミルクが足りなかったら、言ってな。」

私は苦いコーヒーが飲めないので、いつもミルクと砂糖を自分で入

れるのだ。

去年に何回かお邪魔に来たから、私の好みを覚えていてくれているのか、甘さはちょうどいい。

「大丈夫です。」

「そっか。」

彼はコーヒーを一口だけ口に含んで、少し考えたように言った。

「…あのさ、美月はクリスマス空いてる？」

クリスマス…。

イブの昼は清香と彩ちゃんと遊びに行く予定だ。

ケーキバイキングの招待券を3枚ゲットしたとのことで、彩ちゃんに誘われたのだ。

そして、夜は家族でご馳走を食べたりすることになっている。

けど、次の日、クリスマスの予定はがら空きだ。

お姉ちゃんは1日遊びに行くらしいから、家で特にやることもないだろう。

「空いてますよ。」

私がそう言うと、彼の表情が一際明るいものに変わった。

クリスマスに何かあるのだろうか。

私が疑問に思っていると、悠希さんはにっこりと笑って言った。

「じゃあ、今日のババロアのお礼をしたいから、1日あけておいてね。」

「お礼なんて…。」

ただの趣味で、しかも姉の命令ついでに作ったのに、お礼なんて申し訳ない。

私はすぐに遠慮した。

「友達がバンドやっていて、クリスマスライブやるらしいんだけど、1人で見に行くのは淋しいんだよ。
大したお礼じゃないけど、美味しいもの奢るしさ。」

彼は少し焦ったように言ってきた。

そういう風に言われると、断れないなぁ。

…決して、美味しいものに釣られたわけではない。

私は彼の誘いを受けることにした。

「分かりました。よろしくお願いします。」

彼の優しさに私は自然と頬が緩んだ。

ふと、悠希さんの彼女さんにちょっと悪いなと思った。

きっと、クリスマスは都合が悪くて一緒に行けないのだろう。

「けど、悠希さん。彼女さんがいるんですし、無闇に他の人を誘っちゃダメですよ。」

私はからかい半分、忠告半分で、彼に言った。

勘違い＝誤解

瞬間、コーヒーを飲んでいた彼は突然激しく咳こんだ。

その普通じゃないむせように、私は驚き、

「だ、大丈夫ですか？」

と、恐る恐る声をかけた。

彼はめちゃくちゃ苦しそうにして、何かを訴えるように私を見た。

な、何かまずいことを言ってしまったのだろうか。

私は少し焦って、彼に聞いてみようとした。

が、

「はぁ！？兄貴、彼女いるのっ！？」

リビングのドアを勢いよくあけた清香の声にびっくりして、私も悠希さんも言葉を失った。

切り分けてきたババロアをテーブルに置いて、清香は彼に少しつり上がった目をむける。

盗み聞きしていたのか、聞こえたのか、清香は悠希さんに疑問を投げかけた。

「ちょっと、どういうこと!?」

清香はなぜか怒ったように、悠希さんへ疑問を投げかける。

だが、なぜそこまで清香が怒りをあらわにしているのか分からない。

私もお姉ちゃんに彼氏がいたと知ったら、驚きはするだろう。

けれど、怒ったりとかはしない。

むしろ、相手の男性を崇拝したい気持ちで満たされること間違いなしだ。

私はこの事態がよく分からず、交互に2人を見た。
。
「清香、ちょっと落ち着いてくれって。」
やっと普通に呼吸ができるようになったらしい、悠希さんが清香をソファーに座るように促した。
清香はつり上がった目をそのままにして、しぶしぶ私の隣に座った。
彼は少し困った顔で、私に聞いた。
「えっと…美月、どこから俺に彼女がいるって話を聞いたの？」
「聞いたも何も…6月に悠希さんと映画館で会ったとき、一緒にいたじゃないですか。」
あれは…私が中学時代の友達と映画を見に行った時だった。
映画を見終わって、帰ろうとしたときに悠希さんを見つけて、私が声をかけた。

そのとき、彼の隣に清楚で可愛らしい女の人がいたのだ。

私はデートなのだろうと思って、挨拶だけして帰ったのだが、彼は覚えていなかったのだろうか。

私は悠希さんをちらっと見た。

少しの間、記憶をたどった彼は、思い出したようで、あれか、と呟いた。

私が小さく頷くと、悠希さんはちょっとだけため息をついて、苦笑を浮かべた。

「兄貴、思い当たるふしでも、あるわけ？」

しばらく黙っていた清香がしびれを切らしたようで、悠希さんに聞いた。

「あの日、一緒にいた人は友達の彼女だよ。」

「友達の彼女？」

清香が意味が分からないという風に聞き返す。

私もイマイチよく分からない。

「美月はちょうどタイミング悪くて会わなかったみたいけど、本当は俺の友達と3人で見に行ったんだよ。

…清香、あいつのことだよ。晶(あきら)の彼女、知ってるだろ？」

清香はそれを聞いて、納得したような顔をした。

きっと、清香はその悠希さんの友人を知っていたんだろう。

テーブルの上のババロアに手をのばしながら、

「なぁ～んだ。慌てて、損しちゃった。」

と、清香がいつもの調子で言った。

「俺は今、付き合ってる人はいないよ。清香、当たり前だろうが。」

悠希さんは少し呆れたように、清香に言った。

なんだか…私だけ会話についていけてない。

今までの話をまとめると、
映画館には友達、友達の彼女、悠希さんの3人で行っていた。
そして、悠希さんには現在彼女がいないらしい。

それは、つまり…

「私の勘違い？」

「まぁ、簡単にまとめるとそういうことよね。」

清香はそう言って、ババロアを口に入れた。

私は少し恥ずかしくなりながら、悠希さんの方を見た。

「ということだから、安心して、クリスマスは誘われちゃってよ。」

悠希さんは笑いながら、私に言った。

勘違いで、2人を振り回してしまった私は素直にはい、と返事をするしかなかった。

鋭い姉と鈍い妹

天気が荒れてきた。

水っぽい雪がぴちゃぴちゃと降っている車窓の外を見て、私は悠希さんに車で送ってもらってよかったと思った。

雲行きが怪しいから、と車を出してくれた彼の優しさに私は心から感謝した。

「今日はありがとう。ババロア、本当においしかったよ。」

私の家について、彼は言った。

清香と悠希さんは実に味わって食べてくれて、作ってきてよかったなと思った。

特に清香の食べっぷりは、ひと切れ食べた私が見ているだけでお腹いっぱいになるほど、素晴らしかった。

「喜んでもらってよかったです。」

お姉ちゃんのために作ることが多いお菓子だが、

彼女は基本的に文句、しかも、「砂糖が多いわよ。私を太らせる気？」と、自分中心的なことしか言わない。

だから、2人のような反応は本当に嬉しかった。

「送ってくれてありがとうございました。」

「どういたしまして。」

悠希さんは爽やかに笑う。

助手席に座っていた私は、今更彼との距離が近いんだということに気づいた。

意識した途端、私は何故か彼を直視出来なくなった。

勝手に気まずさを感じた私は、急いで車から出ようとしたが、悠希さんに引き止められた。

「ごめん。帰る前にメアド教えてくれないかな？
クリスマスのこと、後で詳しく連絡したいからさ。」

あぁ、と思い、私は携帯をポケットから取り出す。

音楽を聴くことが好きな私だが、バンドの演奏を生で聴いたことは１回もない。

気に入ったバンドのＣＤを買って聴いたりするだけだったので、実は誘われて嬉しかった。

プラス、美味しいものを奢ってもらえるなんて…私の方が得しすぎだ。

悠希さんに悪いから…また今度、お菓子を作って、持って行こうかな。

私達はお互いのメアドを交換し終わって、携帯をしまった。

「クリスマス、楽しみにしてますね。じゃあ、また今度。」

私は車から降りて、急いで雨が当たらないところへ走った。

車の中にいた彼はしばらく目を見開いていたが、すぐに嬉しそうに笑った。

私は手を振って、彼と別れた。

◇◆◇◆

「ただいまー！」

私はリビングのドアを開けてから、言った。

お母さんはキッチンで夕食を作っているらしく、リビングにはお姉ちゃんしかいない。

私はクリスマスのことを、一応お姉ちゃんに言っておかないとだなと思って、声をかけた。

「お姉ちゃん、私もクリスマスは予定入ったから、その日は何も頼まないでね。」

ソファーにもたれかかりながら雑誌を眺めている彼女は、チラッと私の方を見た。

「誰かと出かけて来るの？」

「うん。清香のお兄さんとバンドの演奏を聴きに行くの。」

私は楽しみだなぁという思いから、ついテンション高く答えてしまった。

「へぇ～。」

お姉ちゃんは少しニヤリとして、言った。

なんだなんだ。

その面白いものを見つけた子供ような笑みは。

嫌な予感しかしないのは、私の気のせいではないと思う。

「美月はその人のことをどう思ってるわけ？」

はい…？

投げかけられた言葉の意味が瞬時に理解できなくて、私は固まった。

私がすぐに答えられず、黙っていると、

「あんたって…本当に鈍いわよね。」

つまんないわ…と呟いて、お姉ちゃんは視線を雑誌に戻した。

小馬鹿にしたような態度のお姉ちゃんに、いつもならムカつくはずだが、今はそんな気持ちにはならなかった。

ただ、考えた。

『悠希さんをどう思ってるか。』

なんで、そんなこと聞いたんだろう…？

どういう意味を含んでお姉ちゃんは聞いたんだろう？

私はモヤモヤした気持ちのまま、携帯に登録されたばかりの悠希さんのアドレスを眺めていた。

懐かしいあの時

おいしい～。

私は大好きな苺のショートケーキを口にいれて、うっとりとした。

本日、クリスマスイブ。

私達3人はケーキバイキングに来ている。

周りには、私達のように友達だけで楽しんでいる人もいるため、居心地がいい。

美味しいケーキを食べて、仲良しの友達と過ごすイブだって、ステキなものだ。

「そういえば、美月ちゃん、悠希先輩とバンド見に行くんだって？」

ふと思い出したような口ぶりで、彩ちゃんがケーキを食べながら、私に聞いた。

突然彼の話をされて、動揺した私は、食べていたケーキを落としそうになってしまった。

…あぶないあぶない。

「うん。明日ね。」

私は落ち着こうと、紅茶を一口飲んだ。

お姉ちゃんに、悠希さんをどう思っているのか、と聞かれてから、彼のことを考えることが多くなった。

けど、今だにその質問の意図と、答えがよく分からない。

はぁ…。
お姉ちゃんは何が言いたかったんだろう。

「じゃあ、デートかぁ！いいなぁ～。」

「…デート？」

誰と誰の話をしているのだろう。

悠希さんのことで頭がいっぱいで、彩ちゃんと清香の話を無意識に聞き逃してしまったのかもしれない。

「デートでしょ！悠希先輩はそう思ってると思うよ？」

「…はい？」

…この話の流れは、もしかしなくても、明日私と悠希さんが一緒にバンド見に行くことをデートと言っているのだろうか。

って、デート！？

私は目を見開いて、一瞬固まった。

そんなこと考えてもいなかった。

デートって…そっか。

男の人と2人で出かけるんだから、そう思われてもおかしくないのかもしれない。

でも、それって……付き合ってるみたいじゃない？

「もしかして、美月はそういうつもりじゃなかったの？」

清香がため息をつきそうな顔で私を見た。

その横で彩ちゃんは苦笑している。

「悠希さんの友達がバンドやるから、見に行くだけだし、デートなんて…。」

「あぁ、悠希先輩と美月ちゃん、音楽の趣味が合うもんね～。」

彩ちゃんが納得しながら、明るく笑った。

そう。悠希さんとは音楽の好みが一致して、よく話をした。

委員会のときに、悠希さんとあるバンドの話で盛り上がったことが始まりだった。

そのバンドは、当時私が心密かにハマっていたロックバンドだ。

けれど、あまり有名なバンドじゃなかったため、私の周りに知っている人はいなかった。

だが、偶然、悠希さんがそのバンドのファンで、ＣＤを持っていた

のだ。

私達はそれがきっかけで意気投合した。

いろんな方面から語り合った。
作詞や作曲の魅力はもちろん、演奏のクオリティや細々とした演出
についてと、ネタは尽きなかった。

懐かしいな、と思う。

…彼と話した委員会の時間はとても有意義だった。

この間、書店で会ったときは音楽についての話題は出なかった。

だから、明日は思いっきり語り合えるのだと思う。

彼が誘ってくれたことに他意はないのだ。

ただ、同じ趣味の私を親切心で誘ってくれただけ。

私は生演奏を聴きに行ったことがないと話したことがあるから、誘ってくれただけで。

それ以外の理由など、ないだろう。

私はお皿の上のケーキをすべて食べ終え、フォークを置いた。

「ねぇ。」

清香に声をかけられて、視線をむけると真剣な顔をして私を見ていた。

清香の凛とした声が響く。

「美月は兄貴のことをどう思ってるの？」

私は驚いて、すぐに言葉が出なかった。

大切な友達

お姉ちゃんといい、清香といい、どうして同じことを聞くのだろう。

「それ、お姉ちゃんにも言われた。」

私は戸惑いを隠せず、呟くように言った。

ちょっと不機嫌な声が出てしまったが、お姉ちゃんに踊らされている感じがして不愉快なのだから仕方ない。

それにしても、ほぼ接点のない2人がどうしてまったく同じことを聞くのか、奇跡のような偶然だ。

けど、質問の意味がよく分からない。

だいたい、お姉ちゃんも清香も物をズバズバ言うタイプだから、こんな回りくどい言い方は普通しないのだ。

何かを、私に隠していると思う。
けど、きっと聞いても答えてはくれないんだろう。

お姉ちゃんはあの後、
「少しは苦労して、答えをだしてみたら？」
と言っていた。

ますます意味が分からない。

私が眉間に皺をよせて考えていると、彩ちゃんがくすっ、と笑った。

「姉妹でも似てないもんだね～。」

うっ…。

…そりゃね、言われているよ。言われ慣れているよ。

けど、言われ慣れていても、ダメージがないわけではない。

身長は１０センチ以上離れている。
…もちろんお姉ちゃんの方が高い。

テストの５教科の合計点が１００点以上違ったときもある。
…もちろんお姉ちゃんの方が上だ。

運動会のリレーでアンカーを毎年やってきたお姉ちゃんと反対に、私は走るのが遅くて、１００メートルは２５秒が自己最高記録だ。

姉妹だからと比べられると、あの理不尽な姉の凄さを改めて突きつけられる。それと同時に私は悲しくなる。

十人並みな顔の私と端正な顔立ちのお姉ちゃんは内面から外見まで、似ている部分がほぼない。

まぁ、性格は似なくてよかったと思うけど、頭脳や身体能力、身長や胸…は少しくらい分けてほしかった。

私は無意識に苦い顔を浮かべていたらしく、彩ちゃんはますますくすっ、と笑った。

「大丈夫！美月ちゃんには美月ちゃんのいいところがあるよ！」

彩ちゃんが私に明るく言う。

今の私には天使のように感じられた。

けど、私は照れくさくて、

「はいはい。フォローしてくれてありがとう。」

と、軽く流した。

基本的に誉められるのは苦手だ。

どう返すべきか分からず、心の中でアワアワしてしまう。

その様子を見て、清香が大きな声で笑った。

先ほどの真剣な眼差しはどこかへ行ってしまったようで、今はいつものように優しい目を向けている。

「お姉さんに先を越されちゃったのね。じゃあ…兄貴の話はやめるわ。」

私がいっぱいいっぱいになっていると察してくれたのか、清香は悠希さんについてこれ以上言わないことにしてくれた。

私は安堵の息をついて、紅茶を飲んだ。

「けど…。」

ん？

清香が呟くように続ける。

「1つだけ覚えておいてね。
私達は友達で……例えば、美月が私に気まずいからって、美月の意見を曲げることはないって。」

彩ちゃんも明るく頷く。

私は一瞬だけ面をくらった。

「それは…当たり前でしょ。」

友達だからこそ、余計な気は使わない、自分の意見はキッパリと言う。

それが今まで仲良くやってきた私達3人の共通点だ。

そのスタンスを私は変えるつもりはないし、変えようと思ったこともない。

どうして、そんなことを清香は言うのか分からないが、私はきっぱりと言った。

「そんなこと、私は考えないよ。」

清香と彩ちゃんは顔を見合わせ、そうだね、と笑った。

「ちょっと悩んだ私が馬鹿みたい。安心した。ありがとう。」

よく分からないが、清香は何かに対して不安だったようだ。

私はそのお礼の意味が分からなかったが、にっこりと笑った。

さて、と私は手をたたく。

「話に区切りがついたし、ケーキをとってこようか。」

私が席を立とうとすると、２人も行く、と立ち上がった。

「さっき食べたあそこのケーキ、美味しかったよ。オススメ。」

清香が指差した方向に彩ちゃんが食いつく。

「どこどこ？食べる！」

目を輝かせた彩ちゃんは目標を確認して、すぐさま取りにむかう。

私は隠れて笑った。

この日、私達３人は今までにないくらいケーキを堪能した。

大事な友達と過ごしたイブは、とっても楽しくて、温かい思い出となった。

聖夜の帰り道

クリスマスライブが終了し、悠希さんに連れられてここへ来た。
隠れ家のような小さなお店だが、出される料理はどれも美味しいらしい。
暖かい店内に美味しそうな匂いが広がっていて、食欲がそそる。
悠希さんのお気に入りのお店だということで、期待が膨らんだ。

私達は料理が来るまでの間、ライブの感想を言い合う。

「めちゃくちゃ感動しました。」

私は興奮が治まらず、上擦った声で語り出す。

安定した歌唱力。
魅せる演奏の格好良さ。

トークもパフォーマンスも巧みで、来ていた１００人前後のファン達は歓声をあげていた。

彼らが手がけた音楽自体も素敵だった。

詞もメロディーもキャッチーで、ＣＤデビューしていたバンドだったら、私は絶対買っていたと思う。

「ＣＤ、文化祭で限定販売してたやつ、貸そうか。」

「いいんですか！？」

私は勢いよく、悠希さんの話に飛びつく。

悠希さんは嬉しそうに笑いながら、頷いた。

ライブが始まる前に紹介してもらった悠希さんのお友達は、バンドのリーダーでボーカルを担当している人だった。

ムードメーカーでチームをまとめるのが上手だった彼は、とても話しやすい人だ。

にこやかに挨拶してくれた。

そんな彼らのバンド、『ＳＫＹ（スカイ）』は大学のサークル活動みたいなものらしい。

大学内でも有名らしく、今日来ていたお客さんのほとんどは大学生のようだった。

ＳＫＹのメンバーは５人。

ギター、ドラム、サックス、ピアノといろんな楽器を使い分ける４人の演奏者とボーカルが１人。

ジャズやロック系の曲調で、生の演奏の迫力は凄かった

私は彼らの音楽にどんどん吸い込まれていった。

耳から、目から、生の音楽に酔いしれた。

2時間のライブはあっという間に感じられたけど、本当に最高な時間だったと思う。

行けてよかった。

「今日は誘ってくれて、ありがとうございました。」

悠希さんの目を見ながら、私は言う。

彼の優しさを思い起こして、自然と頬がゆるんだ。

悠希さんはライブ中、曲やメンバーのことを教えてくれたりした。

始めて行ったライブだったけど、緊張せず、心から楽しむことが出来たのは彼のおかげだと思う。

趣味が同じ人と過ごすって、こんなにも心地よいんだなぁ、と知った。

清香や彩ちゃん達と過ごす時間も心地よいが、何かが違う。

言葉では表せないが、確かな違いがそこにはあるのだ。

「またライブがある時、誘うよ。」

悠希さんがにっこりと笑いながら言った。

私は無性に嬉しくなって、ぜひ！、と勢いよく返事した。

今から、すごくその時が待ち遠しい。

◇◆◇◆

悠希さんと過ごした一時はすごく居心地がよくて、楽しくて、あっという間だった。

料理も本当に美味しかった。

中でも、チキンのグリルが最高で、私は幸せな気分を満喫した。

家についた。

今日、悠希さんは車で来ていなかったが、夜道は危ないということで、家まで送ってくれた。

「わざわざありがとうございました。」

私はきちんとお礼を言った。

本当に楽しいクリスマスだった。

悠希さんと一緒にいると、不思議と時間が早く感じられて、帰り道の寒さもそれほど感じなかった。

ただ、悠希さんが帰り道、そわそわしていたのが気になる。

私はその理由を聞こうと口を動かそうとしたが、彼が先に言葉を紡いだ。

「あのさ。」

ゆっくりと話し出す。

どうしてか、照れたような思い切ったような顔をしている。

「今日、美月を誘ったのには理由があってさ。」

「…理由？」

私が心底わからないというように、聞き返すと悠希さんは苦笑した。

「やっぱり分かってないな。」

悠希さんはため息をつきそうな声で呟いた。

いつもの悠希さんとは少し違う、何かを含んだ物言いに私は気になって、彼の顔を見上げた。

真剣な照れたような眼差しが私を捕らえる。

私は目がそらせなかった。

「俺、美月が好きなんだ。」

悠希さんは白い息をはいて、静かな冬の空気に声をのせた。

何を言われたのか、理解するのに時間がかかった。

私は悠希さんの言葉にただ驚くしかなくて、いつの間にか思考が止まっていたらしい。

気がついたら、ブーツを履いたまま玄関に立ち尽くしていた。

目の前にも家の外にも彼の姿はもうない。

悠希さんとどのように別れたか、まったく覚えていない。

ちゃんと見送っただろうか。

返事をしなかった私に、彼はどんな顔をしていたのか。

気になることはたくさんあるけど、確認するすべもなかった。

メールで本人に確認するというのも変だし、何よりメールをどうや

ってすればいいのか分からない。

もはや、私は彼の言葉が本当に現実のことだったのか、信じられなくなって自分の記憶を疑った

……悠希さんが私を好き。

先ほどの彼の熱い視線と率直な告白を思い出して、私は悶える。

やっぱり、あれは妄想でも想像でも空想でもなく、本当に起きたことだったと確信した。

私は気を紛らわせるように、ただいまと大きな声をあげ、寒い玄関からリビングへ移動した。

「おかえり。」

お姉ちゃんはチューハイを片手に、テレビを見ていたようだ。

お父さんもお母さんもリビングにはいなくて、私は小さく深呼吸をしながらリビングに入った。

ちらっと、切れ長の瞳がこちらを向く。

探るような視線になんだか、怖さを感じた。

私は内心冷や汗をかきながら、何、とお姉ちゃんをちょっと睨む。
少し酔いが回っているらしく、艶めかしく笑いながら私の顔を指差して言った。

「顔がゆでダコみたいに赤いわよ。
もしかして、今日一緒だった彼に好きだとか言われちゃったの？」

「どっ！？」

私はさらに顔が熱くなった。
口はパクパクとするだけで、言葉が出ない。

どうして知っているの、という私の心の声を読み取ったらしく、呆れたような顔でお姉ちゃんは話し出す。

「あんた、鈍いのよ。
異性がクリスマスにデートに誘う、しかも家まで送ってくれる。
どう考えても、美月が好きなんでしょ。」

…そうなの？

私はここ最近の彼とのやりとりを思い出す。

家まで送ってくれるのは、親切心からだと思っていた。

今日だって、どうして誘ったのかなんて、頭をよぎっても、まさかそんな理由だとは思わなかった。

何気なく受け止めていた彼の行動に含まれる意味を知って、私はため息をつきそうになった。

これから、どうすればいいのか、どうしていいのか分からない。

だいたい、こんな事態は初めてなのだ。

恋なんて、私にはまだまだ無縁のものだと思っていた。

男子と話す機会は高校に上がって極端に減ったし、それでも別に気にしていなかった。

言い訳だと言われたらおしまいだが、気づかなかった理由の１つだと思う。

悠希さんを思い出すと、緊張感に似たような、でもどこか違う曖昧

な感情で頭がいっぱいになっていく。
意識している証拠だ。

「こうなると思ったから、その人をどう思ってるか聞いたのに。」

まったく、というような雰囲気で、薄笑いを浮かべながらお姉ちゃんは言った。

それをきっかけに、お姉ちゃんと清香が言っていた言葉を思い出す。

あれはそういう意味だったのか、と今、理解した。

私はソファーで飲んでいるお姉ちゃんの横に座った。

「もっとストレートに言ってくれなきゃわかんないよ。」

私は自分だけが知らなかったという状況が恥ずかしくて、やつあたりのようにつぶやいた。

いつもなら、自分で気づくもんでしょとか嫌味を言いそうなのに、お姉ちゃんは何も言わない。

「私は悠希さんが好きなのかな…。」

一番の疑問が私の頭の中に渦巻く。

彼の姿を思い出しながら、私はクッションに抱きついた。

お姉ちゃんはチューハイを1缶飲みほして、私の方を見つめた。

もう一つの告白

私はお姉ちゃんがアドバイスをくれるのではないか、と密かに期待していた。

上目遣いでお姉ちゃんの顔を覗きこんで、様子を窺う。

形のよい紅桜色の唇が動くのを察して、私は耳を傾けようとスタンバイした。

「私、同棲することにしたの。」

…はい？

私の呟きは無視されたのか、どうでもいいのか、突然告げられた姉の告白に目を点にする。

本日、思考が何回フリーズしたことだろう。

もはや、驚くリアクションをすることに疲れてきた。

いや、もちろん驚いている。

話が飛躍しすぎて…いや、突然話が変わったからだろう。

何を言われたか分からず、頭の中を先ほどの言葉が巡りに巡って、やっと疑問が浮かんできた。

「け、結婚するつもりなの…？」

恐る恐る聞くと、お姉ちゃんは面を食らったような顔をして、次の瞬間には嘲(あざけ)り笑った。

「すぐにって訳にはいかないわよ。
私だって21だし、彼も27だもの。」

相手の人、…27なの。

彼氏がいるだろうことはもちろん予想していた。

バレンタインデーの一件もあるが、何より土日におしゃれして出かける回数が多いことが決定打だった。

けれど、まさか結婚を視野に入れた付き合いをしていたなんて、予想外だった。

悠希さんからの告白をどう対処していいか分からない私とは、根本的に違う。

途端に、私が凄く小さなことで悩んでいるような感じがした。

悠希さんのことが好きか嫌いかの選択肢で聞かれれば、好きに決まっている。

だが、いくら好きでも付き合うとなると、いろんな問題が出てくる。

分からない問題があれば、問題集を見て勉強すればいい。

今まで、苦手な勉強はこうして克服してきた。

だが、今はそういうことができない。

私はこういう考え方しかできないから、ダメなんだと思う。

けれど、積み重ねてきたスタンスは簡単には崩せないもので、なかなか変えられない。

隣に座る彼女を一瞥(いちべつ)し、私はふと思った。

「お姉ちゃんはどんな感じで付き合い始めたの？」

頭に浮かんだ疑問を無意識に零していたらしい。

お姉ちゃんは少し間をおいて、ため息をついた。

「…随分、ズバっと聞くわね。まぁ、美月は恋愛初心者だし、しょうがないか。」

ゴクリとチューハイを一口飲んでから、お姉ちゃんはソファーに億かかった。

ほんのりと紅くなった頬がなんだか色っぽくて絵になる。

そんな彼女の口が発した言葉に、私は自分の耳を疑った。

「私が迫ったのよ。」

口角をあげて華やかな微笑を浮かべる彼女は石化した私を鼻で笑い、私が今まで抱きしめていたクッションを奪う。

「好きになったら攻めるタイプなのよ。
あんたは私とは対照的に攻められるタイプのようだけど。」

お姉ちゃんはイタズラが成功した子供のように意地悪で憎らしい満面の笑みを浮かべた。

まったく参考にならない。

私にはお姉ちゃんのような積極性と自信がないのだ。

大体、私達が対照的なのなら、解決策が同じ訳ありえない。

１８０度違った彼女の経験談は、正直役に立たなそうだ。

「せっかく教えてあげたんだから、チューハイ持ってきなさいよ！」

彼女からの命令が下され、私はやっぱり聞かなきゃよかった、と後悔してソファーから離れた。

真剣に悩んでいる時でさえ、私はお姉ちゃんの玩具かつ僕（しもべ）として扱われるという状況は変わり得ない。

やっぱり、こういうことは自分で答えを見つけなくてはいけない。

悩んでも結局分からないのだから、いっそのこと…。

私は冷蔵庫から出したチューハイをお姉ちゃんに渡して、足早に自室へ向かった。

携帯の画面に悠希さんの電話番号を写し、私は迷いなく発信ボタンを押した。

tell me you

ブルブルと一定の間隔で聞こえる呼び出し音が先ほどまではなかったはずの緊張感をもたせる。

勢いで悠希さんに電話をかけたが、今更躊躇いが生じた。

多少の気まずさというか、恥ずかしさというようなむず痒さを感じているからだと思う。

これは悠希さんが悪いわけではなくて、私の気持ちの問題だからどうしようもない。

バクバクと心臓が騒がしい。

落ち着かなくて、部屋の中をぐるぐる歩きながら、彼が電話に出るのを待った。

早く出てほしいと思いながらも、気づかないでほしいという矛盾した感情が頭を混乱させる。

余計なことを考えるからいけないんだ、と目を閉じて呼び出し音に耳を傾けた瞬間、音が消えた。

携帯の画面には通話中という文字が映されている。

激しい運動をしたわけでも大勢の前でスピーチをするわけでもないのに、声がなかなか出なかった。

何か喋らなくちゃ、と焦るが、私は頭が真っ白になっていて、振り絞るように勢いよく声を出した。

「も、もしもひ！？」

…盛大に噛んでしまった。

時間が止まったかと思った。
大事な瞬間にまさかのミス。

どんな別れ方をしたか分からなかったから、悠希さんの様子を覗えるように話さなければいけないと思っていたのに…よりにもよって、始めでやらかしてしまった。

なんで大事な時にこうなるの、と私は自分に苛立ちを感じていたが、ふと耳に入ってきた音でそれは遮られた。

電話の奥から、彼のくぐもった声が聞こえる。

…少ししして、それが笑い声だと気づいた。

私はほっとしながらも、少し強めの口調で彼の名前を呼んだ。

『ごめんごめん。そんなに意識してくれているとは思っていなかったよ。』

悠希さんの嬉しそうな声に私はうっ、と言葉に詰まる。

明らかにあちらの方が余裕だ。

こっちはいっぱいいっぱいな状態なのに不公平だと思う。

私は少し悔しくなって、愚痴のように本音を零す。

「そりゃ、突然言われたら…混乱します。」

『あはは。そうだね。……でも、結構アピールしているつもりだったんだけどなぁ。』

…アピール、してたの。

それはそれではっきり言われちゃうと…恥ずかしいものなんですけど。

なんだか開き直ってきている彼に私はどんどん追い詰められていく。

これ以上言われ慣れていないことを言わないでほしい。

けれど、彼と普通に会話出来ていること自体は嬉しかった。

…嬉しい？

私はその言葉に少し違和感を感じて、考えてみる。

確かに前々から、悠希さんと一緒にいる時間は居心地がよいと感じてはいた。

その感覚はお姉ちゃんや清香、彩ちゃん達といる時には感じなくて、悠希さんだけが特別だった。

そう、特別…。

それは…何を意味しているのか。

そう思考した瞬間、私の頭にすんなりと一つの結論が浮かんだ。

…あぁ。そうだったのか。

『…それで、電話、どうしたの？』

彼の声がすごく近くで感じられる。

結論を裏付けるかのように、彼優しい、心地の良い声が頭に響く。

心臓がうるさいのも、落ち着かないのも、電話をかけたのも。

それはつまり、そういうこと。

…こんなの私らしくないけど、明らかに私が持っている感情なんだ。

清香とお姉ちゃんが聞きたかった答えが、やっと出た。

『美月？』

名前を呼ばれて、びくっと反応する。

あぁ、どうすればいいかなと、私は少し考えを巡らせた。

悠希さんのように伝えることは私にはできない。

だけど、電話をした理由くらい素直に言おう。

息を大きく吸って、早まる心音を少しでも収めようと努力したが、

効果があったかは分からない。

私は少し小さな声で言葉を紡いだ。

「ただ、声が聴きたかっただけです。」

あぁ…。本当にらしくない。
正直な感情だから、なおさら恥ずかしい。
けど、好きと告げるよりは簡単だった。
そう考えれば多少、羞恥を軽くできた。
私は少し悶えながら、彼の返答を待つ。

『…電話でよかった。』

「はい？」

『そういうこと突然言うの反則。…あー、今、録音しておけばよかった。』

動揺したらしく、冗談混じりに彼は答える。
私は少し目を見開いてから、くすっと笑った。

電話でよかった。

顔を見たら、絶対うまく話せなかった。

私は密かに顔を赤らめて、誤魔化すように笑い続けた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4562z/

対照的な姉妹

2012年1月14日09時49分発行